

## 区民会議・高齢者福祉部会（第1回） 摘録

日 時 平成18年9月7日（木） 10時半～12時

場 所 宮前区役所第4会議室

出席者 委員：鈴木（恵）委員（部会長）、浅野委員、亀ヶ谷委員、永野委員、松井委員、渡辺委員  
関係者：川崎市社会福祉協議会地域包括支援センター調整課長 中澤伸  
事務局：総務企画課企画調整担当主幹、同主査、高齢者支援課長、地域保健福祉課長

開会 あいさつ

### 高齢者福祉・介護の現状と地域包括ケアについて （パワーポイント・説明：川崎市社会福祉協議会中澤）

#### 質疑

**渡辺委員** “痴呆”という言葉と“認知症”という言葉があるが、それぞれの意味は？何か違いはあるのか？

**中澤委員** “痴呆”という言葉には侮蔑的な意味があるのではないかとということで、近年使用が避けられ、代わって“認知症”という言葉が使われるようになってきた。しかし医学用語の中には“痴呆”を含む用語が幾つか残っており、時々使われることがある。

**渡辺委員** 認知症の人は元気だったり、寝たきりだったりするが、体の状態と介護の認定とは関連があるのか？

**中澤氏** 一概には言えない。ただ動ける認知症の方はその分手がかかるということで、認定がワンランクあがることもあるようだ。しかし基本的には介護認定は、動けるか動けないかではなく、その人の状態を元に行っている。

**渡辺委員** 認知症を伴う場合は寝たきりより動ける人の方が手がかかる場合があるが、認定は寝たきりの方がランクが高くなる傾向があるように思う。

**永野委員** 地域包括ケアシステムはイメージの段階ということだが、専門家を集めるなど具体的に動き出している部分はあるのか？

**中澤氏** 現在全国の約89%の市町村が取り組みを始めており、川崎も今年の4月1日からシステムの勉強を行っている。国もマニュアルを用意し、研修等も開いているが、その構築は、地域毎に、その地域の実情や課題に合わせて作りあげていくということになっている。マニュアル（イメージ）を現実に近づけていく試みが各地で行われている。

**永野委員** まちづくりにしても、生活改善にしても、専門家が絡まないと難しいことがある。例えば車椅子で生活をしなければいけなくなった時、その出入りに合わせた部屋や家の改築は、その方面の知識をもった専門家が絡まないとできない。イメージばかりでなく、具体的に人材を集めるといったことがまず必要ではないか？

**中澤氏** 高齢者介護研究会の中では「新しいすまい」というテーマも大きく取り上げられており、住宅改修の問題も研究されている。介護保険の中でも住宅改修の問題は考え始められており、ケアマネージャーだけではわからないということで、「介護に合わせた住宅改修をどうすすめるか」という研修会が、建築家や医学療法士なども入って数年前から開かれている。今後はいろいろな専門家とどう組んでいけるかも課題だろう。

**松井委員** 地域包括支援センターは川崎市内に36箇所ということだが、大体各区に5ヶ所ということか？

**中澤氏** 弱冠区によって差があるが、その守備範囲は地域の住民性も考慮したエリアとなっている。宮前区には5ヶ所ある。（配布資料参照）

**部会長** これまで在宅介護支援センターと呼ばれていた施設が、そのまま地域包括支援センターに移行したところが多いと考えていただけるとわかりやすいだろう。

**浅野委員** 実際に地域の住民はこの地域包括ケアシステムにどうやって関わっていくのか？ 対象者は何をきっかけにシステムに取り込まれるのか？

**中澤氏** そこを皆さんと一緒に考えていくということ。実はこれは非常に重要な点で、先日の宮前区の地域ケア会議でも、地域の活動されている住民の方々と従事者と、それぞれの状況が話し合われた。

地域住民が常に動いている必要はないが、必要な時にどこにいけばいいのか、どう動けばいいのかを地域にどう浸透させていくか。また、必要な人に届いていないなら、どうアプローチしていったらいいのか。その上で地域のことを最も良く知っている住民の方々と話し合っていけるようなしくみにしていく必要がある。

## 宮前区の高齢者の現状と課題、地域活動からの視点など (資料・説明：部会長)

**亀ヶ谷委員** 2年ほどまでに野川の地区社協で座談会をしたところ、高齢者のお手伝いをしているのも高齢者、若い世代をもっと取り込みたいという話がでた。団塊の世代の引退も間近な中、いかに若い世代や次の世代を取りこんでいくかを地域ごとに考えていかないと、これからの介護は大変だろう。

**部会長** 今年、83運動をスタートさせようということだったが、子どもたちの安全を守るために、高齢者の力を使いましょう、高齢者だけでなく、全体で取り組みましょうということだった。若い男性が地域へ出るためのきっかけづくりになればということもあった。

**亀ヶ谷委員** 83運動というのはどこでもやっている。子どもたちの登下校時の8時と3時に合わせて外へ出る。それを具体的に、通学路を万歩計をつけて歩いてもらい、月ごとに一番歩いた人を表彰する。どうせ散歩するなら、目的を持って散歩してもらった方がよい。表彰することで励みにもなる。

**部会長** 今回改正された介護予防メニューの中に、日常機能向上が入っている。日常機能強化が転倒予防につながる。どこかに行ってトレーニングを受けるより、日々目的を持って歩くことで、自分の健康につながる方がいい。そのためには、区役所が保健士などを派遣し、歩き方の講習をする。一番になるために万歩計をつけ、目に見える形で記録が残ると励みになる。徘徊している人を見かけたら、声をかけてもらう。目がたくさんあるといいので、83運動の人がすべて参加すると目も増える。

**亀ヶ谷委員** 通学路の距離を測ってもらって歩いてもらう。

**松井委員** 散歩は健康にいいので、歩く人が増えている。ただ歩くのではなく、緑や植物、昆虫がわかると歩いていて楽しい。宮前区には緑が多い。身近な雑草でも植生がわかると楽しい。子どもたちを見守ることも大事だが、周りの自然を楽しみながら歩くことも大事だ。そのきっかけの場を増やせば、多くの人が楽しんでくれるのではないかな。

最近、菅生台でアンケートをとったが、地域の歴史を勉強しながら歩くことに興味が高かった。歩きたい人と歴史を勉強したい人を一緒にしてプログラムを組む。行政や包括支援センターの考え方は、一人ひとりの生徒の機能向上が目的で、それは正しいが、使い勝手も必要だ。地域の活動を広めるには、こういう制度があるからやれではなく、人つなぎをしないといけない。できるところから、同じ気持ちを持つひとを増やしていくことが大切だ。

**部会長** 歩くというのには実にいろいろな歩き方があって、それだけでも高齢者の問題の解決や掘り起こしにつながりそうだ。

地域包括を利用する視点を持ちたい。「地域包括は動いてくれない」と言う人が私の周りにいたが、「やってほしいことを伝えているのか？」と聞いたら、「言っても無駄だ」と言う。そうではなくて、まだ充実していないのだから、地域で一緒になって作っていく視点を持ち、やってほしいことは地域包括を通じて、周りの人にも「一緒にやろうよ」呼びかけていくことが大切だ。

**松井** 活動を通じてある程度つきあいがあれば、支えようという気持ちも生まれ、自然な形で地域がつながっていくだろう。歌を歌う、体を動かす、物を食べる、そういった事を気軽に一緒に楽しむ機会をもっと増やす。子ども達も興味を持つようなプログラムを展開して、一緒に活動をする。若い人と一緒にやれるプログラムが企画できると良い。

**部会長** 地域でちょっと最近元気ないねという人がいたら、「あそこでウォーキングをやっているよ」とか、「毎日あその公園で体操やっているよ」というような情報を提供していく。

**浅野委員** 今の地域包括支援センターは65歳未満のまだ高齢者でない人には少し入りにくい。宮前区は地域包括支援センターをもっとオープンにして、ボランティア活動者を集めるような拠点にはできないか？元々の発想が違うので難しいかもしれないが、年齢に関係なく、自分の健康や活動をチェックできるような場が身近にあるといいのではないかな。

男性の活動者が少ないという話もあったが、他にやれることも多い中で、自主的に地域の中で自分のやりたいことを見つけて活動する人は少ない。どこかから誘われて、「じゃあやってみようかな」

というような形に、もっとうまく誘導するシステムが地域にあると良い。

活動の情報をゆきわたらせることも一つだろうし、地元で、市民館まで行かなくても何かできる活動の場を増やすことも良いだろう。

**松井委員** 地域の情報を地域の人は意外に知らないものである。情報がもっと伝わりやすいようにしたいといつも思っている。

**浅野委員** 老人憩いの家は行事がいっぱい、新たに何かを足していくのは難しい。既存の施設は使われきっている。そこで施設を変えていく。行政が動くことで「しかたないな」という形ででも、うまく施設が変わっていけばいい。

団塊世代の人たちが定年を迎えて、地元に戻ってくるというが、その受け皿はあるのか疑問だ。プライドが邪魔せずに、地域とうまく一緒にやっていこうという気持ちになるのはそう簡単でないのではないだろう。何かのきっかけで引っ張らないとなかなか入っていけない人も多いだろう。

**渡辺委員** 私も現役時代は会社人間で、自治会の事をやる時間があるなら仕事をしろというような雰囲気があった。その様な価値観から、あえて地域には出てこない人は多い。私の周りでは最近自治会に出てくる男性も増えてきているが、奥さんが相当プッシュしているようだ。やはり奥さんの力は大きい。

**部会長** 私達のすずの会ではボラボラグループというのがある。ボランティアのボランティア、つまり奥さんのボランティア活動をバックアップするボランティア活動をする旦那さんたちの集まりだ。男性はパソコン、作文、書類作成など、仕事柄の特技を持っている人が多く、それを活かして活動してもらっている。また、表舞台に出たがらない人が多いので、飲み会や交流会、カラオケなどをして、交流をしてもらう。そうすると互いにあいさつもするようになる。

**永野委員** 地域教育会議は中学校区単位にあり、色々な人が参加しているが、学校が主導になる傾向がある。最初はなんでも話せる場と期待したが、徐々に「学校の子どもをどうするか」という話だけになってしまった。これからは、公的なものと離れたしくみも必要ではないか。これまで福祉は縦割りで、障害者、高齢者というふうに仕切ってきた。子ども会の世話人も、青少年指導員もみんな同じような世代になってしまっている中、縦割りをずらして、色々な人が入ってこられるようにする必要がある。

**部会長** 高齢者ばかりでなく、男性、多世代など、これがまさに区民会議の目標とするところではないか。

**松井委員** 都市マスタープランでも、中学校区を単位とした「地域まちづくり協議会」をうたっている。顔の見える関係であり、歩いて動ける中学校区くらいの範囲の中で、すこやか活動や、地域教育会議、まちづくり協議会などの活動をつくっていく動きがあり、これをうまく活性化できるかが鍵ではないか。自治会は世帯数にも差があり、自治会だけでやっていくのは難しいので、やはり学校くらいの範囲で、福祉を含めた暮らしを本気で考えていかなければならない。

**永野委員** 宮前区は8中学校区でちょっと広い。歩く範囲という小学校区くらいが適当ではないか。小学校区だと大抵3~4の町会は少なくともある。例えば地区社協や民協などと、町会の絡みがあまり無い。私は先日の総会で紹介されて初めて民生委員を知った。

**部会長** 以前から地域ケア会議というのがあり、私は地域の色々な人が入る場だと思い、ぜひボランティアグループも入れてくださいという申し出をしていたが、なかなか入れてもらえなかった。良く聞いてみたら、専門職の方々が集まって会議をする場ということがわかり、「えっ！それが地域ケア会議？」と思ったことがあった。ぜひ本当の地域ケア会議をつくりたい。

ボランティアも、問題を抱えていて何とかしたいと困っている方も、どなたでも入っていけるような、ゆるやかな場が地域の中にでき、そこに専門職の方も来て、一緒に考えていけるようなテーブルをつくれたらいいな。それができれば、その地域の特色や課題にも対応ができるのではないか。

**永野委員** 市民活動団体には、その活動に共鳴した人しか集まってこない。行政が町会長さんたちに「こういうことをやるから」と呼びかける方が良いのではないか？市民活動団体に負担が大きくないか？

**部会長** 行政からというのと、どうしても上からというようなことになるから、そうではなくて地域からの声でということ、伝えていただくとやりやすい。

**永野委員** 子ども安全・安心協議会で小学校区単位で、子どもの見守りを行っている。それを行政が校長会議を経て、伝えたことにより、問題なくスムーズに各小学校の協力を得ることができた。情報の流し方も大事だ。

**松井委員** 行政は未だに「お上」という印象持強くあり、そのお墨付きがあればやりやすい一面もまだある。また一方では、これとこれだけやればよいというように、組織が形骸化してしまいがちな一面もある。地域に一方的に押し付けても駄目で、自主的な部分も吸い上げるなどその辺の取り合わせを上手にやっていくことが重要だ。

**永野委員** 行政が場をつくってくれて、中身は地域主体で決めるのがよいのではないか。

**部会長** 住民主体のやり方には様々あり、より楽しい活動ができると思う。行政はそれをバックアップしてくれると良い。バックアップを受けることで活動がもっと広がっていく。住民だけでやっているのは、内輪のお楽しみだけになってしまう。高齢者の分野に限らないのではないか。

**亀ヶ谷委員** いろいろな福祉の団体があり、活動内容がラップしている部分もある。自然発生的な団体、これから生まれてくる団体、大きな団体や小さな団体、これらの団体の活動の中身も含めた整理・調整をどうするか？区民会議の提案としては、説得力が必要である。既存の活動は、言葉が不適切かもしれないが、一生懸命やっているが、個別にバラバラで動いている。その中で、全体の目的、目標を整理し、明確にしていかなないと、ただ情報を伝えましょうといってもうまく伝わらない。

**部会長** 平成 17 年に、活動団体の活動状況や活動内容などを聞き取り調査してまとめた資料があるので、参考になるだろう。確かにバラバラに活動している一面はあるが、障害者の分野など一部の分野では協力しあっている団体も見られる。また区社協には、活動団体の連絡会議があり、本来は得意分野のはずである。しかし、区社協の持っている情報と区の持っている情報が少しずつ違う。例えば健康づくりグループは区社協のグループには入っていないが、区役所のグループには入っている。その辺りを整理する必要はあるだろう。

**松井委員** 今日の説明だけではまだ理解できていない部分もあるが、この新しい地域包括のシステムをいかにうまく活用していくかが重要だ。資料を見ると、「連携・連絡調整・コーディネートを行う機関」とある。これがすごく大切であり、ここに地域の人達、活動団体がうまく入り、地域でのケアができるようにしていく、動いていく。それがやれたらいいな。

**浅野委員** 地域包括支援センターが独立して地域のケアシステムを確立するのではなく、ケアシステムという発想において、地域包括支援センターを設置するという。だから高齢者の人はまず地域包括支援センターにまず相談する。このシステムを元に進めていくのではなく、このシステムを稼働させるんだと決め、それに基づいて行政を組んでいかなないと動かない。ここに示されているのは初歩的な考え方で、具体的な話はない。

**中澤氏** これをつくっていくのはこれから。例えば病院とどう関わっていくかと考えた時、何か働きかけが必要かもしれない。アクションを起していくことが求められる。

**松井委員** その意味でも地域の企画力や創造力が大事だと思う。

**部会長** 地域包括では地域での運営委員会を持つというような考え方はあるのか？

**中澤氏** 小地域でのケア会議を持つということはある。

**部会長** ケアシステムができ、うまく機能していけば、いろんなところとの連携で高齢者を支え、いろんな人の意見を取り入れたしくみができるのではないか。それを育てていくのは地域かな。

**永野委員** 構想だけではなく、実現するためのアクションプランをつくり、それを一つ一つ実行していかなければいけない。

**浅野委員** 地域包括支援センターは事業者委託であり、委託の内容を広げるような話はできない。宮前独自に委託に条件をつけたり、内容を付加するには、独自の予算をつけたり、そのための組織やボランティアを確保しなければならない。こういった業者又は団体が委託を受けるかにも関わってくる。地域包括支援センター以外に、総合的な地域支援センターを設立するという話になるかもしれない。

**中澤氏** 地域包括支援センターの役割は介護保険法でこの 4 月 1 日から位置づけられている。これにまったく新しい機能や内容を付加することは、制度的にも、金銭的にも人的にも難しいが、お医者さんとの関係の構築や権利擁護、ネットワークの形成を地域に合った形で進めていくことは役割になっている。

**松井委員** 地域包括支援センターの運営に地域の人達が意見をいったりできる場はあるのか？

**中澤氏** 運営協議会が設置されることになっている。川崎では、全市と各区で 11 月くらいから開かれる。最初は包括支援センターってどんなところか、どういう風に向かっているのかのやりとりになるだろうが、何年か経てば業務の評価的なものも入ってくるだろう。

**浅野委員** 介護予防の範囲の人だけ対象になるとか、年齢制限とか、対象者の範囲を無くした形のもの

がなにかできれば良い。

**部会長** もしかしたら、私達がやっているすこやか活動でいるんな人が月に一度集まって話し合っているのが、本当の地域ケア会議なのかもしれない。包括も、お医者さんも入っているし、ここまでのには5年かかったが、地域の課題を毎月話し合っている。地域包括が話し合いのテーブルをつくっていただけると良い。包括は担当地区を持っているわけだから、その地区で何かできないか。場所はあるのだから包括支援センターの中で、話し合いの場ができるように調整していただけると良い。それができると先ほどの79の団体がそれぞれの活動している地域で集まって話し合ったり、連携して介護予防につながっていくのではないかな。

**高齢者支援課長** 地域包括支援センターの施設を使って、地域のボランティアや民生委員などが参加する地域包括ケア連絡会議というのを来年開催できるように準備している。できる地域は今年からでもやってもいいだろうし、できない地域はできる地域と一緒にいるなど、なんとか今年度中に始められるよう動いている。

**部会長** 今準備している最中ということだが、関心のある市民が声をあげてもいいのかな？それともメンバーになるには選ばなければならないのかな？

**高齢者支援課長** どんな人を呼ぶのかはまだわからないが、センターの方から御通知をさしあげるといふ形だと思う。ただ、今区役所でやっているケア会議と同じようなものを、各地域でもやっていくということ。区全体より、地元になった方が、人的にも、金銭的にも、より密度の濃いものができるのではないかと期待している。

**部会長** 地域の声が入るようにぜひ指導をお願いしたい。宮前区らしい地域包括支援センターが生まれるように、わたしたちも参加しながら、地域のことを考えていき、住みやすいまちをつくっていききたい。

**永野委員** ここにあるボランティアや町会自治会、民生委員など福祉に関わった人だけを集めるのではなく、これらに出て来られない色々な人が入って来る様な物を考える必要がある。手をあげた人が自由に出入りできるようなものにしたい。

**部会長** 課題解決に向けた取り組みということでは、地域の中でウォーキング、歩くことをとおしてということの一つ出た。自然観察しながら歩くとか、子どもの見守りをしながら、健康のために歩くとか、徘徊者の発見システムにもなるかもしれない。いろいろな歩き方ができる。

それから地域のトータル的な会議の場ということで、地域包括支援センターを活用した、何かうまい場を持つことができないだろうかという話題が今日は中心になったように思う。

次回は、取り組みの内容をもう少し詰めて考えていきたい。

今後の予定

- ・ 9月25日(月)10時より、第2回の部会の会合を行うことになった。
- ・ 10月20日(金)に開催予定である区民会議の全体会の前に、課題解決に向けた取り組みを具体的に検討し、まとめる作業を行う。